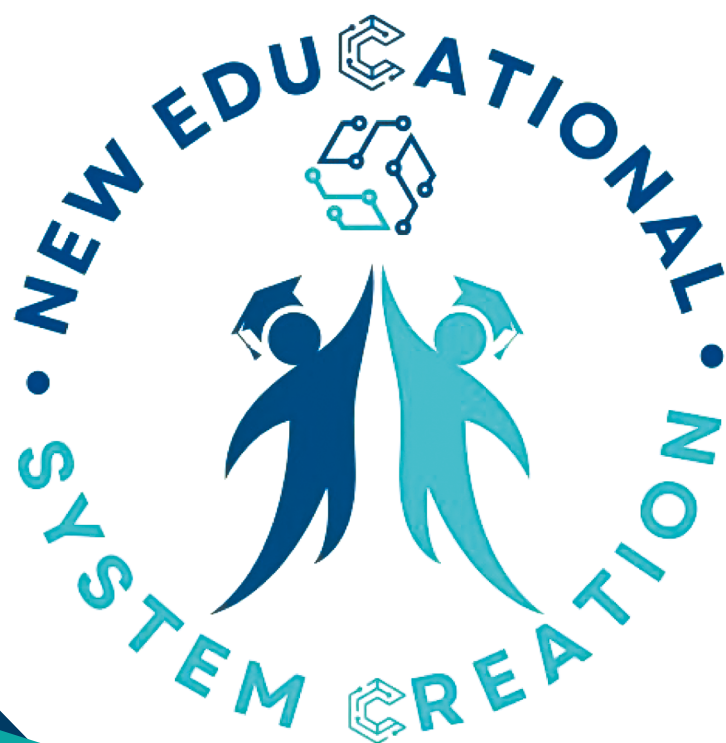


Positive Learning Program

虎の巻

地域とともに創る、
個別最適な学びの実践ガイド



10月11日(SAT)

公益社団法人日本青年会議所

2025年度 国家グループ 新教育システム創造会議

目次

01 はじめに	3
02 Positive Learning Programとは	5
03 実践事例集	19
04 地域の反響と変化	35
05 私たちにできること	37
06 まとめ	38
07 Q&A	39
08 問い合わせ先	40

01 はじめに

1-1.国としての方針

生きる力の醸成を根本とした学習指導要綱の構成は、新しい時代の目指すべき学校教育の姿として**全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現**が提言されています。

未来の社会を見据え、児童生徒の資質、能力を育成するに当たっては、このような生きる力を基本とした学習指導要領の趣旨を踏まえ、学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これまで培われてきた工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導にいかすことで、主体的、対話的で深い学びの実現に向けた学びの機会へとつなげていくことが重要と考えられます。

(文部科学省 学習指導要綱説明書より引用)

1-2.運動の原点

社会が急速に変化し、私たちは**正解のない時代**を生きています。AIやロボット技術の進展、グローバル化が進む中で、無数の社会課題が存在し国力の低下が危惧されています。こうした時代においても、未来を築くための宝でもある、多様な子どもたちの資質向上に努めることがより良い未来の創造へ大きな一助になることは疑いようがありません。しかしながら、従来の画一的な知識習得だけでは、子どもたちが自らの人生を主体的に切り拓く力を育むことは困難です。求められるのは、一人ひとりの個性と興味関心を軸に、自ら問いを立て、協働しながら学ぶ力を育てる、新しい学びの仕組みです。教育改革の本質は、**変化に適応する力**ではなく、**自ら変化を創り出す力**を育てることにあります。子どもたちが**好きややってみたい**を原動力に、自分らしく社会に関わる未来を描いていく。そのために、私たちは学びのあり方を問い直し、時代のニーズを捉えた新たな教育の形へと挑戦することで、教育改革の先にある、明るい豊かな社会の実現に向け共に歩みを進めましょう。

1-3.課題と JC の使命

しかし現実には、子どもたちの好きや興味を起点とした学びは、まだ十分に社会に根付いていません。教職員の人材不足や地域との関わりの希薄化により、学校だけで子どもたちの学びを支えることには限界があります。

だからこそ、地域全体で子どもたちの学びに関わる仕組みが必要です。そして、全国に広がるネットワークを持つ私たち青年会議所だからこそ、地域と地域をつなぎ、この運動を全国に広げていくことができます。変わりゆく未来をただ見ているのではなく、自ら行動し、子どもたちと地域の未来を共に創る。それが、私たち JC の使命です。

1-4.理想の未来に向かって

地域社会(企業、住民など地域に属する全てのもの)が、子どもたちと関わり、対話し、共に育んでいく。子どもたちの伴走者として、JCメンバーをはじめ地域の人々が子どもと寄り添い、対話を繰り返す。子どもが本当にやりたいこと、知りたいこと、興味があること、それを地域社会で実現させていく。子どもたちはこの経験を共有し合い、また次の探究をしていく。学びを楽しむことが身に付いていき、いつしか学ぶことに主体的となり、自己肯定感も向上していく。そうすると、子どもたちに必要な未来を切り拓く力も身に付き、地域が活発になる。この好循環が、地域をよりよく、持続可能にしていき、この運動こそが地域社会の開発になっていくのです。



02 Positive Learning Programとは

2-1. Positive Learning Program(PLP) とは

Positive Learning Program(PLP) は、子どもたち一人ひとりの個性や興味関心を起点とした、新しい学びの仕組みです。私たちは、個別最適な学びと協働的な学びを両立させることで、子どもたちが自らの人生や社会を創造していくために必要な資質と能力を育み、探究心や社交性といった生きる力の醸成を目指しています。

2-2. PLP の仕組み

基本構成

1 **子どもの興味関心を引き出す**

ワークシートや対話を通じて、子どもたちの好きややってみたいことを抽出します。



2 **伴走者によるサポート**

地域の大人(伴走者)が対話を重ねながら、子どもたちの主体的な学びを支援します。



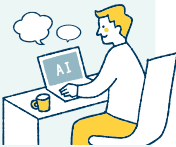
3 **地域社会との連携**

地域企業や有識者と関わる機会をつくり、実体験を通じて学びを深めます。



4 **生成AIによる支援**

伴走者と子どもたちのコミュニケーションを記録し、生成AIを活用してフィードバックを得ることで、伴走者の資質向上も図ります。



2-3. 有識者チームの設置

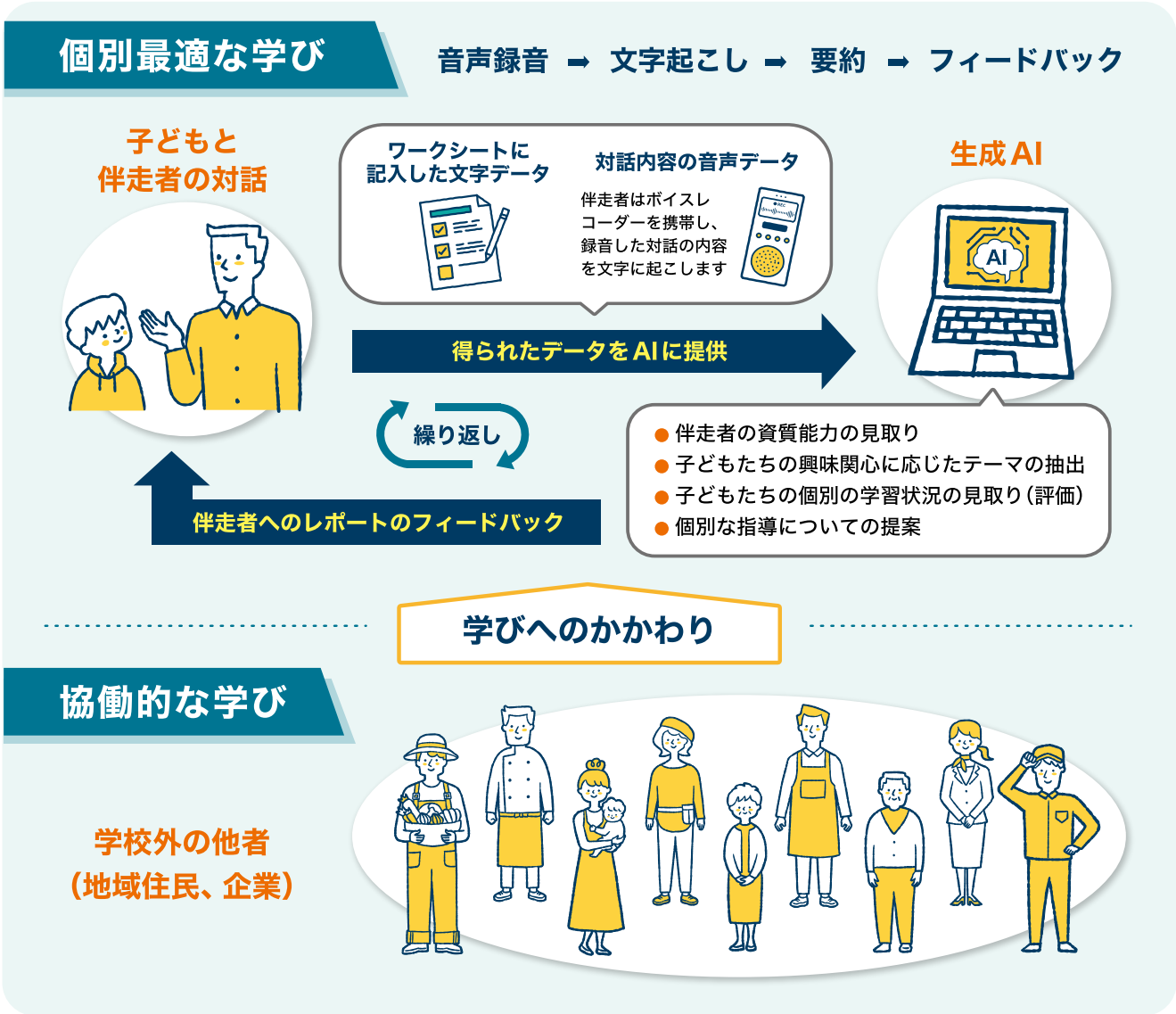
PLPの構築・推進にあたっては、教育関係の専門家を交えたPLPスタートアップチームを発足しています。このチームが、運動の監修とサポートを行い、継続的な運動の質向上を支えています。

〈2025年度のスタートアップチームメンバー〉

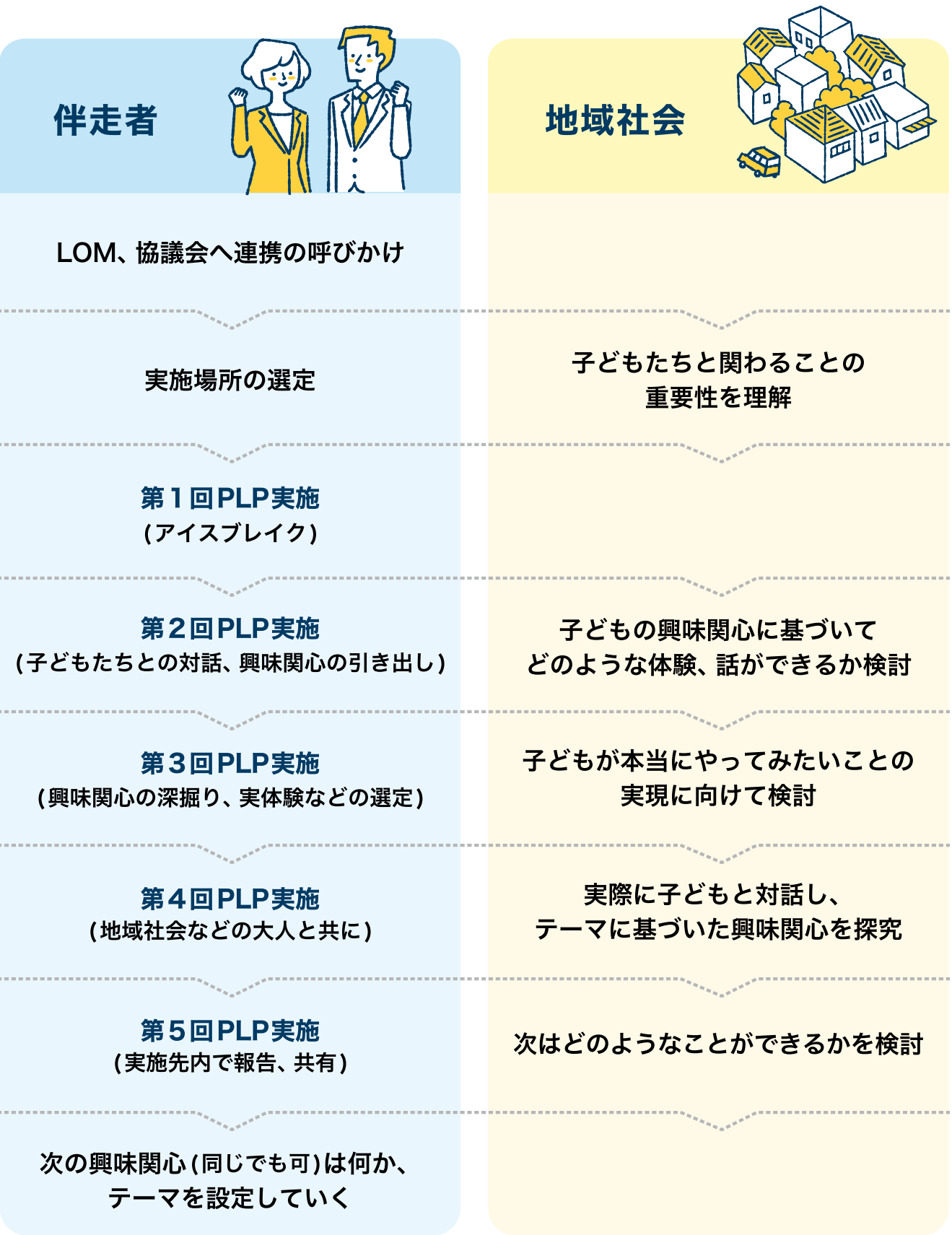
- 金子 嘉宏 氏 (東京学芸大学教育インキュベーションセンター長 教授)
- 遠藤 太一郎 氏 (株式会社カナメプロジェクト取締役CEO 東京学芸大学 教授)
- 中村 尊 氏 (NPO 法人フリースクール全国ネットワーク代表理事)
- 岡部 悟志 氏 (ベネッセ総合研究所主任) ● 新教育システム創造会議メンバー

2-4.目指す未来

PLPは、子どもたち一人ひとりの学びを個別化しながら、地域社会と協働して新たな学びの場を創出します。これにより、地域全体が子どもたちの成長に関わる**共育社会**の実現を目指しています。



2-5. PLPを実施するにあたってのフロー(約3ヶ月)



2-6.PLP実践の重要ポイント

1

子ども2～3人に対して
伴走者1人

1人の先生が30人程度の生徒に指導を行う通常の学校教育とは異なり、より子ども一人ひとりの探究心や好奇心に寄り添った学びの機会を提供できます。

2

LOMがハブとなり
地域企業や地域の大人を
巻き込む

青年会議所が中心となって地域の企業や大人たちが子どもと交流し、教育に参加する機会を設けることで、より社会につながった学びの場を作ることができます。

3

伴走者支援のため
生成AIを活用

伴走者と子どもたちの対話やワークシートの内容を生成AIで分析し、興味関心に沿った探究テーマを効率よく提案したり、接し方や指導方法に対するアドバイス等を受け取ります。

2-7. PLP実施時のチェックリスト



伴走者として初めて参加する際、
事前に研修動画を視聴したか

動画はこちら ▶

伴走者事前研修動画 前編

伴走者事前研修動画 後編



音声を記録できる媒体を持っているか



子どもに対する伴走者の数は適切か
(子ども2～3名に対して伴走者1名目安)



可能な限り参加予定の子どもの特性や注意点を
実施先にヒアリングしているか



笑顔を忘れていないか



アイスブレイクを準備しているか
(カードゲーム、ボードゲーム、テレビゲームなど
簡単にできるもので可)



2回目以降であれば、前回までの実施を
伴走者で振り返ってみたか



当日の目的を決め、伴走者で共有したか
(無理に進めなくても良い)



子どもが複数人いる場合、伴走者と子どものペアを決めているか

2-8. PLPはLOMのこんな事業や運動に活用できる

1 PLP × 青少年育成事業

Q 子どもたちの主体性を重視し、課題解決や自己肯定感を高めるような事業などお考えではないですか？

A PLPは子どもたちが主体的に物事に取り組めるように作られたシステムです。ワークシートの活用や伴走者のコーチングにより、子どもたちが物事を探究し、計画を立てて実行するといった学びの機会が実現できます。

2 PLP × キャリア教育

Q 地域の仕事を知ることや、子どもたちが自身の未来を考えるきっかけになるような機会、職業体験事業などをお考えではないですか？

A PLPは自らの興味関心から物事を探究することに始まります。自らの意志で知りたいことや体験したいこと、なりたいことへと追求する姿はまさにキャリア教育。子ども一人ひとりが「自分らしい生き方」を見つけ、社会的・職業的に自立していくための力を育む機会には効果的です。

3 PLP × まちづくり

Q 子どもたちに地域の課題や未来を考えてもらう。そんな事業をお考えではないですか？

A PLPは子どもたちが描く理想の未来に向かって、自らどんなことができるのか。今まで考えもしなかった奥深い部分にまで、伴走者とのコミュニケーションや地域社会との交流から多様な価値観に触れ、新たな知識の習得や経験を重ねることができるシステムです。
PLPを通じて生み出される発想や行動は地域をより良くする貴重な機会となります。

PLP実施の上での注意点

- ◆ 子ども2～3名に対して伴走者は最低1名必要です。実施前日までに対象となる子どもの数をおおよそ把握し、伴走者の数も調整した上で実施するようにしてください。
- ◆ 子どもによっては、対話から興味関心を引き出すことに時間がかかることもあります。地域の有識者や相談できる窓口などへのホットラインは事前に確認しておいてください。
- ◆ 子どもの特性によっては、急きょ参加できない等の事態も発生することもあります。事前に連携する関係各所には理解いただいた上で関わりを持ってください。
- ◆ 子どもによっては、聞かれたくないことを抱えている方もいます。無理に家族構成や過去のことを聞こうとしないでください。
- ◆ それぞれの興味関心に基づき実体験を実施するとマンパワーだけではやりきれず想定以上の労力となります。1人でも多くの方や地域企業を巻き込みながら実施をしてください。
- ◆ 子どもがPLP実施を希望していないのにも関わらず、実施することは控えてください。実施中に変化があっても同様であり、無理強いはしないでください。
- ◆ 施設外への移動など実施場所から離れる予定がある際は、事前に実施先と確認を取り合い、保護者の同意もいただってください。
- ◆ PLPを実施するというより、地域社会が子どもと関わるのが重要であることを念頭に置きながら運動を進めてください。
- ◆ 子どもの集中力は年齢にもよりますが1時間が限界です。連続して実施する場合は休憩を入れることや、アイスブレイクを盛り込むなどの工夫をしてください。
- ◆ 子どもの体調などによっては突然の参加キャンセルなども想定できます。柔軟な対応が求められますが寛大に接してください。
- ◆ 同性でないと会話をしたがない、大人数では行動できない、大きな音がするのが苦手、など様々な特性を持っている子どももいます。可能な限り事前実施先などの子どもを理解しているところへどのような子どもがいるのかを確認するようにしてください。
- ◆ 文字を書くより絵で表現する方が得意などの子どももいます。柔軟にその子どもが一番自身や物事を表現できる方法で引き出してあげてください。

..... 対話の中で気をつけること

会話と対話の違いとは…

会話

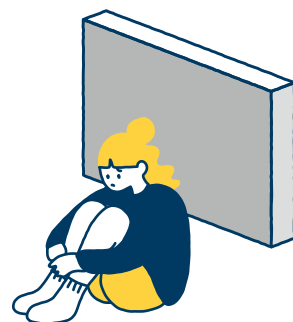
「二人または数人で話をする」という意味です。特に深く理解し合うためや議論するといった意味合いはありません。

対話

「二人が向かい合って話をする」という意味です。単に顔を向き合せて話をするということではなく、直接向き合って意思を伝え合う、理解し合うためのコミュニケーションのことを指します。言い換えるとしっかりと話し合うことです。

1 子どもを子ども扱いせず、一人の人間として対等に相手をする

子どもは子ども扱いをされると、すぐに壁を作ってしまう。対等に話を聞いてくれる人でないと、深掘りをして引き出すことができません。例えば、上手くいってないことを子どもだからといって「とてもよくできました」のように伝えることは、子どもにとって最良な声掛けにはならないのです。



2 大人の常識や固定観念を押し付けない



大人になると、これまでの経験や思考をもとに判断、決定していくことが多くなります。一方で、子どもたちの自由な発想を尊重することで、新たな価値観を見出すことができます。子どもたちの思考を傾聴する、興味関心を深掘りするためには、対話から引き出す意識を持ちながら、無理に誘導することのないようにしてください。一緒に思考し、相互で提案することについてはとても重要ですので、終始聞き手になることは避けてください。また、意見を否定することもしないでください。

3 興味関心がない場合

興味関心がないと言われる場合、まずはその子どもの感情を探ってみましょう。最近楽しかったことなどに留まらず、怒ったこと、悲しかったこと、悔しかったことなど様々な感情について聞いていきます。そこからなぜその感情になったのかを深掘りしていくと、この子どもの思考や興味関心にたどり着くことができるかもしれません。



4 やりたいことをやらせてみる



子どもがやりたいことは、一度やらせてみるのが得策です。例えば、一番やりたいことがゲームであればゲームをやらせましょう。そこに何を求めているのかを対話の中から引き出してあげることで、興味関心を引き出すきっかけとなるかもしれません。

5 自身のことを伝えていく

対話の中であなたの感想などは積極的に伝えていきましょう。大人とのコミュニケーションでも一方的に話をされると嫌悪感を抱きませんか？より良いコミュニケーションは、自分自身のことを伝えると同時に、相手がどう考えているのかを引き出すために、相槌を打つことや、「そうだね！私もそう思う」などの反応を示してあげることが効果的です。



6 大人も楽しみながら対話する



重要なことは、大人も心から楽しみながら子どもたちと対話することです。余計なことはあまり考えずにしましょう。子どもは大人と対話するだけで様々な学びを感じています。大人も子どもと対話することで、新たな価値観に触れることができ、発想の参考になります。今日も笑顔で楽しく子どもとの対話をしていきましょう。

..... 生成AIの使い方と注意点

PLP では、伴走者が子どもとの関わりをどうしていけば良いのかのフィードバックを生成 AI から提示してもらえようになっています。子どもと対話する際にご自身のスマートフォンや音声を録音可能な機器で記録していただきます。そのデータを生成 AI に読み込ませフィードバックが返ってきます。



周囲で他のPLPを実施し騒がしい、屋外の実施で騒音が入った、などでもある程度であれば生成 AI が人を分類して解析してくれますのでまずは一度提出をしてみてください。窓口は日本 JC の担当委員会になります。

生成AIは、情報の正確さを正しく判断できる大人が使用するべきとされています。PLPでは、子どもとの関わりをどうしていけば良いのかフィードバックを貰うことになっており、子どもが生成AIを活用することはありません。

重要なのは、先端技術の活用自体は今後求められてはいきますが、いかに活用できるかであり、使うこと自体の能力を上げることはありません。

参考: フィードバックレポート

生成AIによるグラフィックレコーディング（凡例）

あなたの温かい関わりが、生徒たちの探究心を育てています！

素晴らしい関わりポイント

生徒と一緒に楽しむ

新しい教材に積極的にトライ

つまずいても寄り添う姿勢

生徒一人ひとりに丁寧に対応

これからのヒント（行動につながるアドバイス）

オープンクエスチョン

生徒の「？」「！」をひき出す問いかけ

試行錯誤を促す

あえて生徒が考える余地を残す

学び合いの場づくり

生徒同士の対話を見守る

メッセージ

新たな発見や面白さを見つけていきましょう！

◆ 伴走者の方へ

今回の対話、拝見しました。生徒さんと一緒にゲームを思い切り楽しんでいる様子、とても素敵でしたね！あの和やかな雰囲気は、日頃から生徒さんとの間に築かれている信頼関係があってこそだと感じます。また、micro:bitを用いたプログラミングなど、新しい技術や教材を積極的に授業に取り入れ、計画的に進められている点も素晴らしいです。特に、後半のプログラミング活動では、生徒さん一人ひとりの進捗や表情をよく見て、丁寧に対応しようとされている姿勢が印象的でした。つまりいている生徒さんに寄り添い、一緒に考えようとする関わり方は、伴走者として非常に大切な資質ですね。

これらの素晴らしい強みを活かしながら、次は、生徒さんの中から湧き出る「もっとこうしたい!」「これって何だろう?」という探究心を、さらに引き出していくプロセスに挑戦してみるのはいかがでしょうか。生徒さんが主体的に考え、試行錯誤する場面を少し増やしてみることで、先生ご自身にとっても、きっと新たな発見や面白さが見つかるはずです。

今後の活動をさらに充実させるためのヒントとして、いくつか具体的な視点を ご提案させていただきます。

◆ 生徒さんの「?」「!」を刺激する問いかけ

プログラミングの課題を提示する際に、「今日はこれを作ります」だけでなく、「このセンサーを使って、身の回りのどんな問題を解決できるかな?」「どんな面白いものが作れると思う?」といった、答えが一つではないオープンな問いかけから始めてみるのはいかがでしょうか。生徒さん自身のアイデアや疑問が生まれる「余白」を大切にすることで、より主体的な学びが期待できます。

◆ エラーや予想外の動きは学びのチャンス！

生徒さんのプログラムがうまく動かなかったり、予想外の動きをしたりした時こそ、学びを深める絶好の機会です。「お、面白い動きになったね！なんでだろう?」「エラーメッセージは何て言ってるかな？原因を探ってみよう」と、

すぐに正解を教えるのではなく、生徒さん自身に考え、原因を探らせるような「壁打ち」役を意識してみてください。一緒に試行錯誤するプロセスそのものが、貴重な学びとなります。

◆「教え合い」で学びを豊かに

プログラミングはどうしても個人作業になりがちですが、時にはペアワークなどを取り入れ、「お互いのプログラムの良いところを見つけ合ってみよう」「わからないところを教え合ってみて」と促すのはどうでしょうか。生徒さん同士が教え合い、学び合う場面を作ることによって、理解が深まるだけでなく、コミュニケーション能力も育まれます。先生はその対話を温かく見守り、必要に応じてサポートするファシリテーターのような役割を担うことができます。

◆センサーデータを「見える化」して次の問いへ

micro:bitで取得した光や温度のデータを、MakeCodeの機能などを使って画面上でグラフにしてみるのも面白い試みです。「このグラフの形から、どんなことが言えるかな?」「このデータ、他に何かに応用できないかな?」と問いかけることで、単なるプログラミング操作に留まらず、データの分析や解釈、そして新たな課題発見へと繋がる可能性が広がります。

◆「できた!」の次へ繋げる振り返りの習慣を

活動の終わりには、ぜひ数分でも振り返りの時間を設けましょう。「今日新しくできるようになったことは何かな?」「一番工夫したところはどこ?」「この技術を使って、次はどんなことをしてみたい?」といった問いかけを通じて、生徒さんが自分の学びや成長を言葉にし、次への意欲を持てるようにサポートしてあげてください。簡単な振り返りシートなどを活用するのも効果的です。

今回の対話で見られた先生の温かい関わり方や新しいことへの挑戦意欲は、生徒さんにとって大きな力になっているはずです。これらのヒントが、今後の伴走活動をさらに楽しく、実りあるものにする一助となれば幸いです。

..... 今年度連携したステークホルダー

- 東京学芸大学 (PLP スタートアップチーム)
- 株式会社カナメプロジェクト (PLP スタートアップチーム)
- NPO 法人フリースクール全国ネットワーク (PLP スタートアップチーム)
- ベネッセ教育総合研究所 (PLP スタートアップチーム)
- 北海道教育大学 (PLP 実施時の連携)

..... 今年度実施した場所のカテゴリー



フリースクール

オルタナティブスクール

適応指導教室

通信制高校

プログラミング教室

英会話教室

フリースペース

..... PLP スタートアップチームについて

PLP スタートアップチームは、運動を単年度で終わらせることなく持続、昇華させていくために受け皿を残していく目的と、有識者からのアドバイスを基に運動を進めていくために設置しました。

チーム員の構成としては、教育の専門家である大学教授、生成 AI についての開発や研究をしている先駆者、日本で一番フリースクールが加盟している NPO 法人、民間企業として教育を常に研究し実践されているベネッセ教育総合研究所といった、多岐に渡るメンバーであったため、多角的な視点からのアドバイスをいただけることができました。

一方で、チームへは無償で参画していただいております、それぞれの方の厚意で運営が成り立っています。持続させていくためには、一定の費用負担等も検討していく必要があ

ります。また、協議会やLOM管轄の地域版PLPスタートアップチームを組閣することや、常設委員会により継続した支援についても検討されていることから、地域社会を巻き込んでいける糸口にもなり得ると考えます。

..... 広報実績と成果要因

運動を多くのメディアに取り上げていただくことができました。
通常のSNSの発信だけでなく、PLP スタートアップチーム記者発表、地元メディアでの取り上げ等多くの実績を残すことができました。
記者発表では、テレビ局を含む 11 社 14 名のメディアにお越しいただき、52 件のネット掲載をしていただくことができました。メディアに取り上げていただいたことにより、新たな連携先が確保できたことや、運動に関心を持っていただき各所からお問合せをいただくこともできました。
多くのメディアにお越しいただくことができた大きな要因として、JC からの声掛けに留まらず PLP スタートアップチームからも各メディアからプレスリリースをすることで、これまで JC では届けることができなかった層にもアプローチができた点と考えます。ステークホルダーと連携することで、発信にもより良い効果をもたらすことができました。
また、地元メディアに対してもアプローチすることがより運動を広げることへ有効になると考えます。各種メディアに対するアプローチにおいて、新たな教育システムの構築へ、デジタルの力と企業を中心とした地域社会が関わって展開されている趣旨などを盛り込み説明をすることで、より多くのメディア掲載へつながると考えます。

参考資料: PLP スタートアップチーム記者発表報告資料

03 実践事例集

今年度私たちは、全国各地のフリースクールを中心に運動を展開してきました。
その中で、フリースクールだけでなく教育機関等でも実施し、PLPの可能性を広げることができました。その一部をご紹介します。

3-1. Positive Learning Program 事例1

■開催場所

葵高等学院(新潟県長岡市)

■開催期間

2025/5/15～2025/7/3

■連携LOM

公益社団法人長岡青年会議所

■対象者

生徒15名(高校1年生) 伴走者11名 学校側関係者2名

■実施経緯

PLPのWeb広報に対して、葵高等学院関係者より事業内容等が同校の進める教育カリキュラムに沿っているとの見解からお問い合わせをいただきました。その後、関係各所への説明機会を設け、実施へと至りました。



実施に至る流れ

- ① PLP についての WEB 広報
- ② 葵高等学院からの問い合わせ → 葵高等学院への事業説明
- ③ 連携 LOM(公益社団法人長岡青年会議所)への事業説明 → 参画同意
- ④ 葵高等学院、長岡 JC との実施打合せ → ※以降、実践へと進む

■事前打ち合わせポイント

- ① 葵高等学院の教育方針確認
- ② 生徒数、実施環境、スケジュールの確認
- ③ 連携 LOMの参画状況（伴走者の人数、地域企業の連携可否について）

■実施概要

- 第 1 回 PLP：モクテル作り
- 第 2 回 PLP：子どもたちの興味関心の抽出
- 第 3 回 PLP：興味関心をグループにて共通の探究テーマへと変換する
- 第 4 回 PLP：地域社会での校外学習①
- 第 5 回 PLP：地域社会での校外学習②
- 第 6 回 PLP：PLP についての振り返りおよび発表

■生成 AI による伴走者支援

伴走者と子どもたちのコミュニケーション状況を録音し、生成 AI にて分析、評価を行うことで、子どもたちの主体性を育むことへ有効なコーチングについて振り返りや学ぶ機会へと寄与し、既存教育者に代わる新たな共育人財の資質向上を図る。

■担当者所見



高校の授業の時間割の中に、PLPをカリキュラムとして取り込んでいただき実践できたことは、複数回の開催を計画的に進めることを円滑に行えた要因だったと考えます。但し、進度別学習の観点においては、もう少し各回ごとの期間を設けられれば探究する時間が余裕をもって提供できたのではないかと考えます。

第1回
PLP

モクテル作り

狙い

伴走者と生徒の関係構築のためのコミュニケーション機会であると同時に、主体性を育む効果を取り入れたアイスブレイクの役割。

手法

生徒自身が作成したイメージレシピに基づく、疑似カクテルづくりに取り組むことで、創造や計画から実施、検証の過程を体験する際に伴走者がサポートとして携わり、関係性を深める。

効果

生徒の緊張緩和につながり、伴走者とのコミュニケーションが増加し、物事に主体的に取り組むことの楽しみを実感できる効果。



第2回 PLP

子どもたちの興味関心の抽出

狙い 子どもたちの興味関心を伴走者が抽出し、深堀をする。

手法 ワークシートを用いて、最近気になったことや興味を抱いている項目をリストアップする。抽出された項目に対して伴走者からの壁打ちコーチングを行うことで、興味関心の探究を行う。

効果 何気なく抱いた興味関心と向き合う機会になり、主体的にテーマを捉え進めていくきっかけとなった。



第3回 PLP

興味関心をグループにて 共通の探究テーマへと変換する

狙い 生徒同士間でのコミュニケーションについても重要視する学校側の意向によりグループワークによる探究を進めることで社交性を高める。

手法 生徒一人ひとりが抽出した興味関心をシートへ書き出し、グループ内で共通項を見出しながら、グループで一つの探究テーマを選定する。

効果 類似する興味関心も、生徒同士で比べることで微妙な違いがあることに気付く、その点を伴走者が深堀するサポートをすることで、探究テーマの本質や違った求める理想の形がアップデートされた。



第4・5回 PLP

地域社会での校外学習

狙い

選定した探究テーマについて、更なる知識や経験を得るために、学校外(地域の方々、地域企業)にて学ぶことで、主体的な行動を促進する。

手法

探究テーマに基づき有識者や関係企業などを訪問し、専門的分野の話聞くことや体験を行う。訪問前には予め質問事項や一定の基礎知識を学んだ上で訪問することで、より具体的な学びを得ることができる。

効果

生徒同士での情報や、インターネット上から得た知識だけに留まっていた探究テーマの見解に対して、新たな情報や違った価値観を得ることができた。



第6回 PLP

PLP についての振り返り および発表

狙い

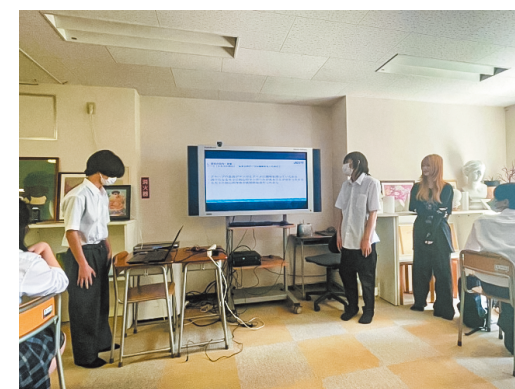
これまでの経過を振り返り、子どもたちが自身の興味関心を深堀し、地域社会での学びに対するサポートを取り入れることで、個別最適な学びを見える化する機会。

手法

これまでの学習を振り返り、発表を前提とした資料作りを合わせて行うことで、検証(インプット)+発表(アウトプット)の機会とした。

効果

個々の興味関心や気になっていたことが、コミュニケーションや地域社会との触れ合いにより変化したり、アップデートすることを実感する機会になった。



3-2. Positive Learning Program 事例2

■開催場所

長崎YMCA(クレイン・ハーバー、フリースクールNoa、フリースクールshoot)

■開催期間

2025/6/16～2025/6/17、2025/7/8～2025/7/9

■連携LOM

なし

■対象者

生徒7名(小学生5名、中学生2名) 伴走者3名 フリースクールスタッフ2名

■実施経緯

PLPスタートアップチームのメンバーであるNPO法人フリースクール全国ネットワーク 代表理事 中村 尊 氏の運営するクレイン・ハーバーによる呼びかけで、長崎の3ヶ所のフリースクール合同での開催が決まりました。連携LOMが見つからない中、新教育システム創造会議スタッフが伴走者として関わる方法を検討し、2日間のプログラムを計2回実施し、振り返りは後日WEBにて開催することとしました。

実施に至る流れ

- ① PLPの事例についてNPO法人フリースクール全国ネットワーク 代表理事 中村 尊 氏と情報共有
- ② 中村氏からフリースクール全国ネットワーク所属の長崎市内のフリースクールに事業説明
- ③ 長崎市内の3ヶ所のフリースクールから参加の合意
- ④ 中村氏との実施打合せ

■事前打ち合わせポイント

- ① 参加フリースクールの教育方針確認
- ② 生徒数、実施環境、スケジュールの確認
- ③ 連携LOM確保について(地域企業の連携可否について)

■実施概要

- 第1回PLP: アイスブレイク、子どもたちの興味関心の抽出、探究のテーマ設定
- 第2回PLP: 校外学習に向けての事前準備、地域社会での校外学習

■担当者所見



実施先の従来の意向としても、子どもたちの主体的な学びに重きを置いており、PLPの導入～実施がスムーズであったように感じます。理解ある環境下で進められることは、伴走者のコミュニケーションを活発にすることへも寄与していました。但し、連携LOMとの関わりについては、急な日程であったことなどもあり、実施の依頼程度で終わってしまった現状もあることから、早期でのPLP周知と依頼のスケジュール管理が重要であると考えます。

第1回 PLP

アイスブレイク、子どもたちの 興味関心の抽出、探究のテーマ設定

狙い

伴走者と子どもたちとの関係構築をするとともに、対話により子どもたちの興味関心を抽出し、探究のテーマを設定する。

手法

スタッフのご当地である岡山の方言クイズを行い、正解者にはご当地のお土産を贈呈します。長崎ではどう表現するかを話し合うことで、お互いの土地柄も理解しながらアイスブレイクをします。その後、ワークシートを用いて子どもたちの興味関心を聞き出し、それに沿って探究のテーマを設定します。

効果

子どもたちの緊張を緩和することで、伴走者との円滑なコミュニケーションが増加し、子どもたちが興味のあることに対して主体的に学んでいくことができる。



第2回 PLP

校外学習に向けての事前準備、 地域社会での校外学習

狙い

第1回で設定した探究のテーマに沿って地域社会に実体験に出ることで、主体的に学びを進め探究を深める。

手法

第1回から第2回開催までに、探究のテーマに沿って子どもたちが実体験できる場所を選定し、1日目は実体験に向けての事前準備を行い、2日目に実体験を行なう。

効果

実体験に向けて事前準備を行なうことでより探究を深めるとともに、実体験を行なうことで新たな探究の問いが生まれ、主体的な学びの姿勢を育み、課題解決能力や思考力を向上させる。



3-3. 子どもの興味関心に基づいた実体験フェーズの事例

① 造山古墳ツアー

■開催場所

自学道場ALTS(岡山県倉敷市)

■開催日時

2025/6/1

■連携LOM

公益社団法人倉敷青年会議所、一般社団法人玉島青年会議所

■対象者

生徒3名(8～10歳) 伴走者3名 スクールスタッフ1名 親2名

■実施経緯

岡山の城について調べたいと最初は言っていましたが、なぜ城に興味があるのかを深掘りした結果、岡山の歴史について学び、県外の人に広報することで岡山に来る人を増やしたいという思いがありました。倉敷の歴史的建造物を調べる中で、桃太郎伝説や古代吉備の古墳群に興味を持ちました。その中でも全国第4位の規模を誇る造山古墳が岡山にあると知り、調べてみることにしました。造山古墳蘇生会というボランティアガイドをしている団体に連絡をし、ガイドツアーをしていただけることになり訪問に至りました。

■実体験後の探究について

造山古墳に実際に訪問することで、子どもたちはそのスケールの大きさについて感動したようでした。ボランティアガイドのお話で古墳の歴史的意義やまだ未解明のことも多いということが解り、更に造山古墳も含めた桃太郎伝説について調べていくことになりました。また、古墳を模型にして作って展示したいということで、発泡スチロールと紙粘土を使って古墳の模型を作成しました。今後は更に完成度を高め、造山古墳ビジターセンター等への展示ができないか相談していきます。そして、造山古墳だけ

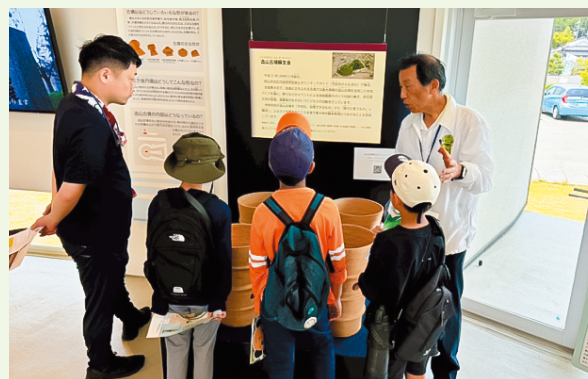
でなく他の古墳も調べて、遊びながら古墳について知ることのできるカードゲームを作りたいというアイデアも出てきており、今後どうやって作っていくか相談することになりました。

■担当者所見



子どもたちそれぞれに様々な興味関心があった中で話し合いを行い、古墳を見学したうえで、古墳の模型を作ることでスクールの子どもたちの総意としてまとめました。古墳のボランティアガイドの方にガイドしていただき学んだうえで、電気工事会社や JC メンバーの関わりで発泡スチロールと紙粘土による古墳模型作りをしました。今後は古墳というテーマで何ができるか子どもたちが主体的に意見を出し合っており、一つの体験から更に次の関心、次の探究に繋がっていった点も評価できます。

活動の様子



② 自動車整備工場見学

■開催場所

(有) エス・ユー・エヌサノート(岩手県花巻市)

■開催日時

2025/6/10

■連携LOM

一般社団法人花巻青年会議所

■対象者

生徒6名(10～15歳) 伴走者4名 適応指導教室スタッフ1名

■実施経緯

当初は、自転車の改造をしてエンジンを搭載、マフラーを装着するなどをやりたいと言っていたが、対話を重ねるにつれて、自動車などの仕組みを深掘りしたいということがわかりました。これまで独学で学んでおり知識も一定にはありましたが、本業の方に話を聞きたいということになり、実施を決定しました。

別の子どもも自動車に興味があり、自動車の構造などを見てみたいという意見もあり、適応指導教室に通っている子どもたち全員で訪問することになりました。

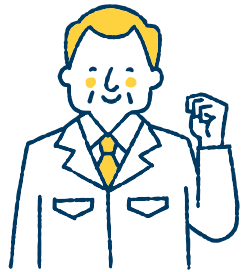
事前のPLPで何を聞きたいか、何を見たいかをそれぞれ考えて訪問することで事前イメージを沸かすことができたとともに、企業側にも子どもたちの希望を伝えることができました。

■実体験後の探究について

実際に自動車を下から見ることで、構造や仕組みを理解することができていました。また、工具などにも興味を持っており、その説明をしていただきました。実体験後は、走る仕組みやどうしたらオリジナルの改造をすることができるかを深掘りしたいという希望もあり、今後も訪問したいと話していました。

受け入れをしてくれた地元企業の方も、子どもたちが真剣に見聞している姿を見て、これからもどんどん関わっていききたいと力強くお話をされていました。

■担当者所見



始めは自転車の改造をしたい!と熱望していた子どももいましたが、対話を繰り返していくうちに自動車の構造に興味があることがわかりました。工場では、目に留まる全てに関心を抱き、目を輝かせていたのが印象的でした。帰り際に「また来てもいい?」と聞いている姿と、それを快く快諾してくださっていた企業様を見て、この運動の根幹はこういった子どもと地域の繋がりであると確信することができました。

活動の様子



04 地域(PLP実施先)の反響と変化

4-1.PLP実施前の現場における課題(PLP実施発表会参加者の声)

- ◆ 学力の平準化と効率を重視した授業構成(先生少数に対して生徒多数の構図)
- ◆ 多様な子どもたち一人ひとりに対応していきたいものの教職員の人材不足や業務負担増
- ◆ 地域社会との関わりの希薄化(地域の人との対話や交流、実践的な学びの場が少ない)
- ◆ 試験や進学が目的になりがちで、人生を主体的に生きる力を育む教育が後回しになっている
- ◆ 学習の自由と自己決定の欠如(子どもが自分の興味や好奇心を起点に学ぶ機会が少ない)
- ◆ 教師主導型のカリキュラムが主流で、自律的な学びが難しい
- ◆ 一律の評価基準に依存(テストや通知表による評価が中心となっている)
- ◆ 間違えてはいけない、みんなと同じでいなければいけないといった空気が自己表現を妨げる

4-2.PLPへ期待したこと(PLP実施発表会参加者の声)

- 既存教職者に代わる人財が、子どもたちの学びをサポートすることで、子どもたちの多様な価値観をサポートできること
- 多様な大人が子どもたちに触れ合えることで、子どもたちの個性を尊重した学びの機会を提供できる可能性
- 地域社会との対話や交流による社会性を育むことで、子どもたちに社会との関わりを感じさせることができる可能性
- 官民連携(教育機関-民間)による学びのサポートで、多方面から子どもたちの学びを支えること
- 子どもたちの興味関心を軸に据えた学びの機会を展開できることで、主体的に物事に取り組むことを体験できる可能性

4-3.PLP実施を経て感じる事(PLP実施発表会参加者の声)



すべてを学校の中で完結させるのではなく、地域にはさまざまなスキルや経験をもつスペシャリストがいることに目を向け、もっと開かれた関係性を築いていくことができれば、子どもたちはより多様で深い体験型の学びを得ることができると思います。

フリースクール職員である私自身も、福祉の現場での経験しかありませんし、学校の先生たちも教員としての経験に限られている場合がほとんどです。だからこそ、地域の企業や職人、専門職の方々とつながり、子どもたちが多様な大人と出会いながら学んでいける環境を整えていくことが、今後ますます重要になるのではないかと感じました。

PLPは、不登校の子どもたちにとっての学びの可能性を広げるだけでなく、学校教育の中でも非常に有益な実践だと思います。



既存の教育関係者でない人たちが教育へと参画しようとしている行動は、現在の教職員もしくはその延長でのサポートに頼り切った実情が維持困難であり、従来の学校教育から脱却できない側面があります。子どもたちにとって、可能な限り一人ひとりと向き合いサポートしてくれる環境や人財がこの事業をきっかけにより良い方向へと進められればと感じました。



取り組んだ施設については、自身が関わる子どもたちの価値観を広げるためにも地域の大人が関わる重要性を感じ、今回のプログラムが有益なものと改めて認識ができた。

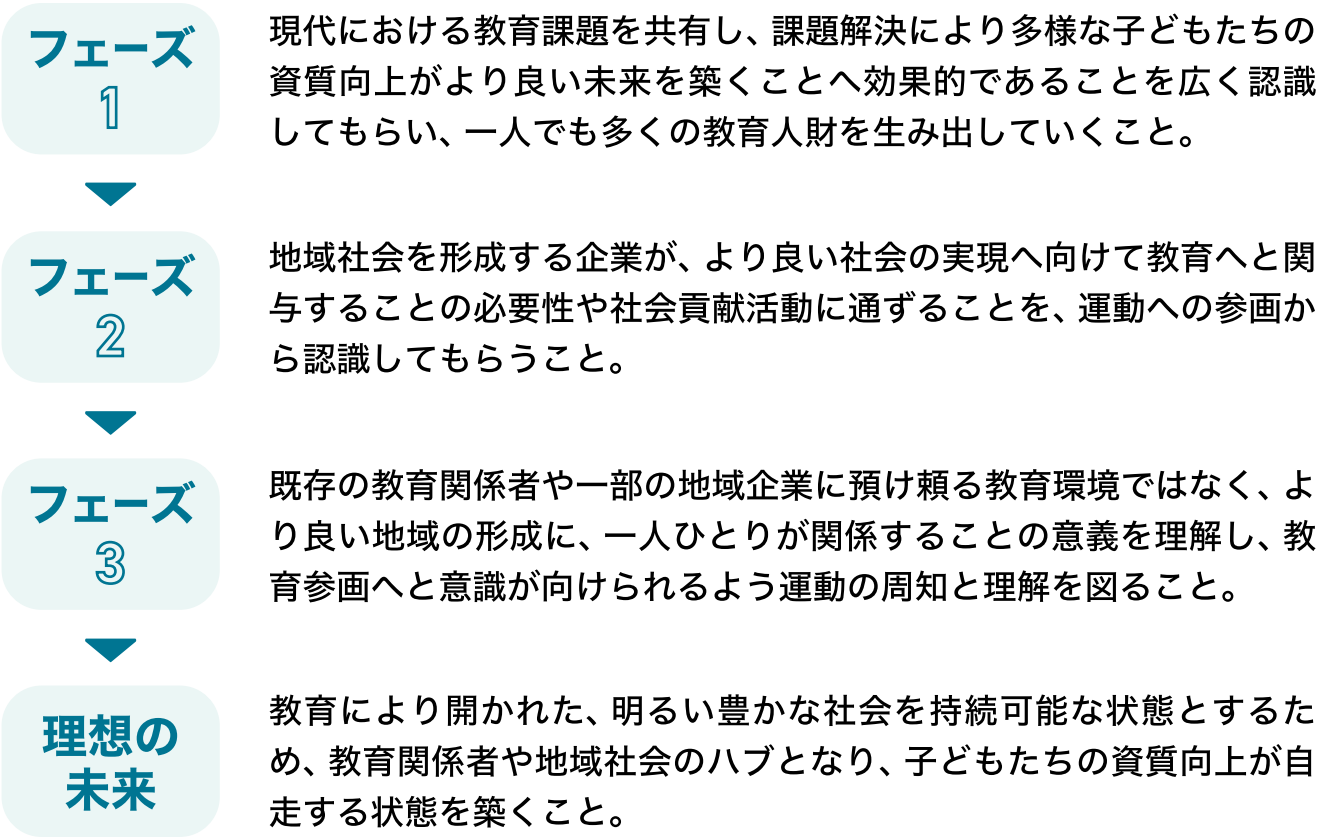
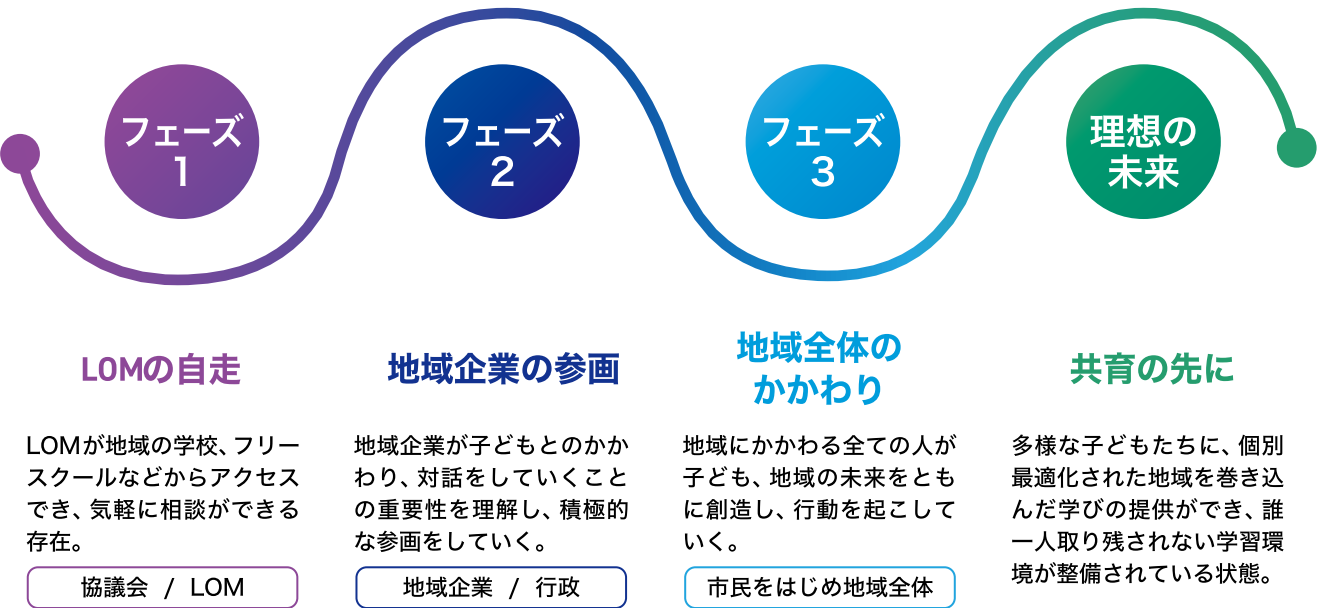
地域の大人が子どもの学びに関わっていくときは、人間関係構築から行わなければいけないので、FS等の子どもがいる場所と地域教育に関わる大人の長期的な関係性構築が土台としてあると子どもたちも取り組みやすくなると思いました。

PLPを通じて最も印象に残ったのは、子どもたちが自らの興味関心を起点に学びを深めていく姿でした。さらには、教職員ではない大人たちが伴走者として関わることで、子どもたちが社会とつながる新しい学びの形が見えてきました。



05 私たちにできること

新教育システムのロードマップ



06 まとめ

私たちの推進する「**Positive Learning Program(PLP)**」は、単なる教育プログラムではありません。

それは、日本の教育の未来を変える**社会全体の共育システム**の第一歩です。

これまで日本の教育は、学校の中だけで完結することが当たり前とされてきました。しかし、子どもたちがこれから生きていく社会は、想像もつかない速さで変化しています。AIの進化、価値観の多様化、予測困難な未来。

だからこそ、子どもたち一人ひとりの**好き**や**興味**を起点に、自ら考え、行動し、社会と関わる力を育む「学び」が必要です。

この運動を全国に広めることは、教育だけの問題に留まりません。

地域の大人たちが、子どもの学びに関わることで、地域全体が成長する。

それが本来の共育の姿です。

私たち青年会議所は、地域と社会の未来を創る組織です。

だからこそ、今こそ私たちが先頭に立ち、この教育改革を推進する責任があります。

変貌する未来をただ傍観するのか、それとも自ら動き、創り出すのか。

私たちはその問いに、行動で答えます。

仕組みを変えるだけでは、未来は変わりません。

行動する大人が増えることで、子どもたちの未来は必ず変わる。

地域とともに、未来を創る学びの循環を、全国に広げていきましょう。

07 Q&A

Q.1 何人から実施できますか？

A 子ども1名から実施することができます。子ども2～3名に対して伴走者が1名を目安にしてください。最大人数に制限はありませんが伴走者の確保ができる状態かつ一人ひとりが実体験を満足にできることを優先してください。

Q.2 実施候補先から断られました。どうしたらいいですか？

A 実施先に、子どもたちが地域社会との関わりを持つことで新たな視点を持つことができることなどのメリットを改めてお伝えし、それでも実施が困難であれば無理に実施することは控えてください。

Q.3 子どもとの会話が続きません。どう対話していけばいいですか？

A 何も話したくないのか、話すことが苦手なのか、体調が悪いのか、など多岐に渡る要因が考えられますので、無理なく何が要因なのかに耳を傾けてあげてください。

Q.4 興味関心が何もないと言われましたが、この場合はどうすればいいですか？

A 今何もないとしたら、過去に何か興味を持っていたのか、過去に嬉しかったことや腹が立ったことは何か、などから引きだしてあげるのも一つの手段です。

Q.5 PLP実施を周知していましたが、参加者がいませんでした。どうすれば参加してもらえますか？

A 飽くまで子どもがやりたいと思っている上でPLPを実施する必要があります。無理強いすることないようにしてください。その中で、PLPが自分が興味があること、やってみたいことができる可能性もあることを伝えてみていいかもしれません。

08 問い合わせ先

総合受付先

新教育システム創造会議 議長
宮坂 宥憲 (みやさか ゆうけん)

諏訪圏JC (北陸信越地区 長野 BC)

電話番号 : 090-5820-5135

Mail: yuken@okaya-shokoji.com



担当地区 : 北海道地区・東北地区

副議長
下坂 大夢 (したさか ひろむ)

花巻JC (東北地区 岩手 BC)

電話番号 : 090-6781-4269

Mail: hiromushitasaka@gmail.com



担当地区 : 中国地区・四国地区・九州地区

副議長
濱井 健太 (はまい けんた)

倉敷JC (中国地区 岡山 BC)

電話番号 : 080-3781-0171

Mail: kenta0712.hama@gmail.com



担当地区 : 関東地区・北陸信越地区

副議長
宮脇 達樹 (みやわき たつき)

駒ヶ根JC (北信越地区 長野 BC)

電話番号 : 090-5419-1850

Mail: tatsuki@miyakenn.com



担当地区 : 東海地区・近畿地区・沖縄地区

副議長
足立 教至 (あだち のりゆき)

神戸JC (近畿地区 兵庫 BC)

電話番号 : 090-3708-4382

Mail: n-adachi@adachi.tech



この冊子は、全国大会フォーラム資料として作成されたものです。